

1 通常の「発表」は苦痛でもある。内発的なテーマの不在が主な理由である。

2 私の最近の論文も、半ば書評的なものであって、もっぱら批判が主であった。

なお、以下および報告当日においても拙稿は「業績リスト」に従って（これは一番最近のものであるが）[2019-a]というように表記する。なおリストは、電子版で公開している。

3 それでも、私の関心を惹く「問題」を見つけることはできた。[2019-a]では加藤節氏の Locke 解釈を検討したが、そこから「思想と生」といった問題性を拾い上げることができた。[1976-b][1978-c]は私の“デビュー論文”とも言えるものであるのだが、実はここでは、Hegel「思想」の転回を彼の「生」（体験）に関連づけて説明した。[1986-b]では、彼の「思想」は（客観的な科学思想の対極に在る）「詩」とも性格づけると説いた。

「思想」の「生」との関連性は Wittgenstein についても論じられている。これについては facebook の安彦ページで「コメント」したことが在ったのだが、「生」との関連を重視する「思想」解釈に対して、永井均氏が「そういうのはゲスの極みだ」と批判していた。

4 しかし、（これは或る種私の Hegel 論を批判することにも（実は）なりうるのだが）「哲学」（「倫理学」）はむしろ自分の「生」のためのものであるべきではないとも考えている。2013-4 年にはこれを問題としたいいくつかの（三木清批判等の）論稿を公表した。

5 少し飛ぶが、「倫理学」プロパーの問題としては、自ら一定の規範的主張をするのではないいわばスタンスとしての「メタ倫理学」ということが関わってくる。（これについても facebook で“論争”したことが在った。）また、そもそも哲学そのものがメタ学か？

6 さらに飛ぶことになるが、そもそも（各）個別学問の言説はどのようなものなのか。そこには枠組み（パラダイム）といったものが在るのであって、それを逸脱することは「カテゴリー・ミステイク」になるのでは？、といった問題性も浮かんできた。これは「学問論」上のテーマでもある。以前には学問論で論文（[2008-f]等）も書いてきたのだが、この問題が改めて意識に登ってきて、その未解決が 1 の「理由」の一つともなっている。

7 昨年までの「コロナ禍」下では、一種の実存性であると言えるかもしれないが、「これは夢ではなかるうか」とも 2020 年初めには思ってしまった。その圧倒的な現実性との対比でたとえば TV ドラマが「単なる演技で嘘っぽく」感じられてしよがなくなったりしたのだが、そこで「そもそも“リアル”とは何か」と問うべきであるとも考えさせられた。

8 もう一つ、「マスク着用」などを争点として、自由主義 vs. 功利主義ということが改めて意識されてきた。Mill もそうなのだが、両方を説く思想家が多い。しかし、両者はどのようなかたちで両立できるのか。（小泉 Mill 論や安藤 vs. 大屋も参照。）Mill の「危害原理」で（「他人に危害を加えるので」というかたちで）感染者の行動の自由を制限することはできない、という解釈を見たことが在った。しかし、これは妥当な見方なのであろうか。

9 この Mill と絡んで、「自由と功利」ということが——「そもそも自由主義とは何か」という問いと共に——意識に（再度）登ってきている。（[2012-c][2018-b]も参照。）

10 これについて纏めて報告するなら、通常の「発表」となったかもしれないが、それはもう苦痛である。というか、これ以外にも「諸問題」が在って、会員諸氏にできるだけ解決していただいてなるべくスッキリして「余生」を送りたいとも思っている。